

フェミニスト社会科学の科学性と政治性 —— フェミニスト認識論の統合的理解に即して

小野寺研太*

本稿は、フェミニスト認識論に依拠しながら、フェミニスト社会科学の科学性と政治性について理論的考察を行うものである。1980年代以降のフェミニスト認識論では、フェミニズムという特定の価値判断に基づく科学研究がはたして「科学的」であるか、さらにそうした科学研究が政治・社会運動としてのフェミニズムにとってどのような意義を持つかについて、議論が重ねられてきた。本稿は、これらの議論を牽引したフェミニスト経験論とフェミニスト・スタンドポイント理論を取り上げ、フェミニスト社会科学の科学的側面と政治的側面について理論的検討を行う。そこから、科学研究が価値判断と無縁ではなく、かつ価値判断と結びつくことで有益な科学的知見を導くことも可能であること、そしてフェミニスト社会科学は、集団的な知的・政治的運動の形態をとることで、周縁的存在の証言形成や研究者同士の建設的議論に貢献し、認識論的にも意義があることの二点を示す。

キーワード

フェミニスト認識論、フェミニスト経験論、フェミニスト・スタンドポイント理論、科学的／知的運動、認識的不公正

序論

フェミニスト社会科学は、ジェンダーに基づく社会的な差別や抑圧、暴力、不公正、不当な権力関係が生み出す問題を解決するべく、女性の経験やその細部を回復して彼女らをエンパワーし、その集団にとって有用な知識を生み出すことを目的とする

(Wylie 1992)。では、このフェミニスト社会科学は、どんな「科学」なのだろうか。政治的コミットメントや特定の社会的価値観を重視する研究が「科学的である」とは、どういうことなのだろうか。それは、独断主義と何が違うのか。さらに、何らかの価値

*日本女子大学 准教授

判断を重視することは、知識生産という営みにおいて、どのような利点をもたらすのか。その認識論的利点は、政治・社会運動としてのフェミニズムに何をもたらすのか。つまり、フェミニスト社会科学の科学性と政治性はそれぞれどんなもので、いかなる関係にあるのか。そしてそこに、どのような知的意義が存在するのか。これらの問いを考察するのが、本稿の目的である。

本稿が主として依拠するのは、1980年代以降に展開されたフェミニスト認識論 (feminist epistemology)、またの名をフェミニスト科学哲学 (feminist philosophy of science) の知見である。20世紀後半の、諸科学分野における「フェミニストの介入」(Wylie 2012: 48) を前史として、フェミニストであることと科学者であることの両立可能性や、女性の経験を取り扱う学問的意義をめぐる問題が、科学哲学者や社会学者らを中心に議論された。本稿ではそれらの議論を再構成しながら、今日時点で考えられるフェミニスト社会科学の科学性と政治性の関連を論じる¹。

先行研究 (Anderson 2020; Intemann 2010, 2016; 二瓶 2021a) を念頭に置いた上で、本稿の新規性を挙げるとすれば、それはフェミニスト認識論の統合的把握を基礎にして、フェミニスト社会科学が持つ意義の理論的な明確化を試みる点にある。後述するように、フェミニスト認識論は、フェミニスト経験論 (feminist empiricism: 以下、FE

と略記) とフェミニスト・スタンドポイント理論 (feminist standpoint theory: 以下、FSPと略記) の二つに大別できる。両者は、互いを参照することはあっても基本的には異なる立場として発展してきたが、近年は両者を統合して捉える議論も出ており、本稿もこの流れに即している。ここで言う統合的な把握とは、FEとFSPの間にある認識論上の差異 (主なものとして、多様性をめぐる捉え方) を念頭に置きつつも、基本的に両者は根本的な認識を共有しており、フェミニスト認識論の理解において相互補完的な役割を果たすとする見方を指す²。本稿は、こうした統合的把握を補助線として、フェミニスト社会科学の持つ意義について、理論的検討を進めていく。加えて、当該分野の日本語での先行研究もきわめて少ないため、その点でも本稿はいくばくかの貢献ができるものと考ええる。

本稿は以下の構成で議論を進める。まず、フェミニスト認識論における二つの代表的な立場について、理論的な整理を行う (I)。続いて、価値判断や文脈性が科学的探究にいかなる影響を及ぼし、またどのようにして客観性を確保するかという問題を、フェミニスト経験論の知見を用いて検討する (II)。その上で、フェミニスト社会科学が認識論としてはどのような意義を持つかを、フェミニスト・スタンドポイント理論の思想史を踏まえて考察する (III)。最

1 本稿がフェミニスト社会科学に主題を限定するのは、科学界におけるフェミニズム批判を担ってきたフェミニスト科学の中でも、社会科学分野のほうが、研究者や研究対象へのエンパワーメント機能を相対的に強く有している点を重視するためである。

2 本稿におけるフェミニスト認識論の統合的把握に対する理解は、FEとFSPの理論的な共通点と相違点について整理したIntemann(2010)の議論を参考にしている。

後に、フェミニスト認識論から見て、フェミニスト社会科学の科学性と政治性がいかに関係づけられるかをまとめる。

I. フェミニスト認識論の理論的概要

フェミニストであること（あるいは、フェミニズムを支持すること）と科学者であることは両立するか。社会要因の混入を悪しきバイアスと捉えるのが典型的だった20世紀後半の科学哲学において、科学という知識生産の営みとフェミニズムの関係性に焦点を当てたのが、フェミニスト認識論である（二瓶 2018）。

その嚆矢となったサンドラ・ハーディング（Sandra Harding）の『フェミニズムにおける科学問題（*The Science Question in Feminism*）』（1986年）以降、基本的には二つのアプローチが、特定の価値判断や文脈性、歴史性と科学的探究の関係性をめぐる今日的な議論の基礎となっている（Anderson 2020）。一つが、フェミニスト経験論（FE）である。FEが問題とするのは、フェミニズムの価値観が、経験的研究にいか科学的に正当な作用を及ぼすか（反対に、どういう場合は正当でないケースにあたるのか）、科学的方法が科学におけるジェンダー・バイアスや性差別の改善にいか役に立つか、といった問いである。もう一つがフェミニスト・スタンドポイント理論（FSP）である。FSPは、ヘーゲルやマルクス、ルカーチらを理論的源流とし、従属的な立場にある者の知識が、その社会の問題を批判的に捉える上では優位性を持つという考え方を基本とする。マルクス主義が、資本主義社会における労働者の立場に認識論的優位性を与えた

のに対し、FSPはそれを女性の観点に置き換え、女性が置かれた社会状況に基づく知識や経験、あるいは女性の観点が、男性優位社会を批判的に捉える上で優位性を持つとする。FEが主として科学と価値判断の両立可能性を哲学的に問うものだとすれば、FSPは価値判断を重視する科学的探究の批判理論の有効性を考えるものだと言える。

FEとFSPの違いは、念頭に置かれている科学研究分野や主な論じ方の相違にもある。第一に、FEとFSPでは、認識論上の分析対象として想定している専門家集団が異なっている（Rolin 2016）。FEは、学問的な基本概念や、何を知識として重視するかといった認識上の価値観を共有し、専門分野としてのまとまりを有するような科学者集団を想定している。これに対してFSPが議論の対象としている集団は、FEが想定する科学者集団の中にあるサブコミュニティである。FSPが認識の主体と位置づけるサブコミュニティは、FEのような科学者集団に比べて、政治的あるいは倫理的な価値判断や利害が共有されやすい。そのため第二に、FEは自然科学と社会科学にまたがる科学一般における価値判断の正当性を問題にするのに対し、FSPは主として社会科学的な認識と価値判断の関係性を問う。FEが（科学）哲学者らの議論を中心とすることが多く、FSPが社会学者や人類学者の議論を多く参照しながら構成されるのは、こうした理由による。

これらFEとFSPにおいては、その初期から指摘されてきたそれぞれの問題点の克服が、その理論展開の柱の一つだった。FEの場合問題となるのは、二つのパラドックス

である (Anderson 2020)。一つ目は、FE がフェミニズムの立場から科学における男性中心的、あるいは性差別的なバイアス混入を批判しながら、フェミニズムの価値観が科学にもたらされれば男性中心的なバイアスが除去されると想定することの矛盾、すなわちFEにおける「バイアスのパラドックス」である。二つ目は、バイアス混入を社会的な価値観の影響によるものだと批判する一方で、FEは個人主義的な認識論を採用せず、むしろ科学的実践は様々な社会的影響に開かれているべきだとする矛盾、すなわち「社会的構築のパラドックス」である。

FSP かどうか。FSP が応答を求められたのは、認識論的優位性論の妥当性と本質化への懸念である。FSP にとって議論の要となる、被抑圧者（男性優位社会における女性）の認識論的優位性に対しては、FSP における「バイアスのパラドックス」を理由に疑義が呈される (Rolin 2006)。ある認識が別の認識よりも相対的に優位であると主張するためには、それらの良し悪しを判断する統一的な基準を想定しなければならない。他方で認識における価値判断を重視するFSPにとって、全ての知識は何らかの社会的影響を受ける「状況づけられた知識 (situated knowledges)」 (Haraway 1988) でもある。つまりFSPにおける「バイアスのパラドックス」とは、いかなる知識も状況づけられているとする基本的な想定と、認識の優位性を判断するメタ的な統一基準があるという前提が両立し得ない、という問

題を指す。また本質化への懸念とは、FSPでの女性の観点や経験の強調が、「女性」の本質化や安易な単純化を引き起こし、その多様性や差異を抹消することになるのではないか、というものである³。

二つの立場が抱える理論的問題を言い換えれば、次のようになる。FEにとって解決しなければならないのは、研究者の価値判断やその者が行う研究の文脈性（歴史的背景や社会的制約など）の存在を前提にした場合に、その研究が「科学的」だと言えるのはなぜなのか、という問いである。そのためFEの理論的課題は、「科学的である、とはどういうことか」という、科学性成立の条件を問うものになる。対するFSPにとって重要な問題は、社会批判における認識論上の多様性と優位性の両立である。本質化傾向を回避するには、一枚岩の被抑圧者像を想定することなく多様性（差異の平等性）を認めなければならないが、そうだとすれば、ある認識が他の認識に比べてメリットがあると言える、すなわち認識論上の差異の階層化が可能だと言えるのは、なぜなのか。被抑圧者の状況や周縁性を重視した科学的知見が、「被抑圧者である」ことだけで即座に（自動的に）社会批判上の意義を持つわけではないとすれば、どのような場合にそれは認識論上のメリットを有するのか。被抑圧者の多様性とそれらが発揮し得る批判的機能の関連に光を当てる点で、科学知識の政治性を位置づけることが、FSPにとっての理論的課題である。

3 Harding (1986) では、こうした懸念に対抗する第三の立場として「ポストモダン」が提示されているが、初期FSPの本質主義的傾向に批判的な論者であっても、FSP自体の意義は評価している場合がある。

このように説明すると一見、FEとFSPは異なる問題を扱っているようにも思えるが、実際には相互に参照し合う関係だと見なせるだろう。FEだけでなくFSPにとっても、経験科学の成立条件が明らかにならなければ、どのような議論も科学的な正当性を失うことになるし、またFSPは元よりそもそもFEにおいても、フェミニズムという価値判断や政治的コミットメントと科学的探究の両立可能性を探ることは、フェミニスト認識論にとって核となる問題だからである (Longino 1990; 2002)。

両者の理論的な重なりを結論的に先取りすれば、以下ようになる。FEとFSPはa) 科学におけるジェンダー・バイアスや家父長制の存在を問題視し、b) そこから生じるフェミニストの視点と科学的客観性の問題を検討する。そしてその結果として、c) あらゆる科学的探究・知識の非中立性 (状況化されていること) と、その条件下での客観性の担保可能性を探る。加えて、d) その客観性は社会性や文脈に依存する点で蓋然的なもの (= 確実に客観的ではなく、「ある程度」客観的である) になるため、客観性の「程度」をより確実なものとするべく、研究に持ち込まれる価値観や立場は多様であるほうが良いと考える。FEとFSPは、これらの点を共有する認識論である。他方で両者は、多様性の位置づけをめぐる差異を有しているが (後述)、そうでありながらも、根幹的な理解では共通する部分を多く持つ点で、フェミニスト認識論にとっての両輪であると言える。

以下の議論では、FEとFSPそれぞれの知見を組み合わせながら、当初の問いを二つ

に分けて考察する。すなわち、①研究者の価値判断は科学的探究においてどんな影響を及ぼしているか、そして②価値判断や政治的コミットメントを重視した社会科学的研究は、認識論的および社会的にどのような意義を有するか、という二つの問題である。

II. 科学と価値、科学と社会——フェミニスト経験論における科学の中立性と客観性

一般的に想定される科学と価値の関係は、次のようなものである。第一に、科学的探究は価値中立的で、党派性を有さない。第二に、科学的探究の妥当性は、仮説と経験的証拠の関係性に限定される認知的側面のみに基づく。そのため、社会性や歴史性、政治的倫理的価値へのコミットといった非認知的側面は、論理的検討の枠内に入り込まない。非認知的な文脈性が入り込まないからこそ、科学知識は客観的なものとなり、それは客観的であるがゆえに時代や場所を超えて理解可能である。

こうした一般的な想定から考えれば、フェミニスト科学はいかにも「非科学的」に見える。それは科学を名乗りながらもフェミニズム (という特定の価値判断) に肩入れする党派的なものであり、そこから生み出される知見も、フェミニズムという社会的負荷を負ったものである点で客観性を有さない、とみなされるからだ。そうした科学は、フェミニストには有益だろうが、そうでない者には意味がない、ということになるだろう。

しかし20世紀以降の科学史や科学哲学が教えるように、科学と価値、あるいは科学と社会の関係性は、単に無関係だと言

切れるほど単純なものではなく、両者の無関係性を当然の前提とすることはできなくなっている。では、フェミニスト認識論は、こうした科学と価値、および科学と社会の関係性をどのように整理したのか。

1. 科学的探究の価値非中立性

エリザベス・アンダーソン (Elizabeth Anderson) によれば、科学の価値中立性を擁護する論者が懸念しているのは、価値判断が科学的探究に持ち込まれることで、証拠に基づく議論が不可能となる独断主義である (Anderson 2004: 3)。確かに独断主義には、自分たちにとって都合の良い側面だけを強調する希望的観測や、不都合な証拠の忌避が生じるリスクがある。その意味では、独断主義が科学的な営みに持ち込まれるべきではない。

しかし、独断主義が科学に入り込むことと科学的探究に価値判断が作用することは、弁別可能である。その違いは、調査設計や研究の仕方および価値判断の修正可能性に求められる (同上: 7-11)。独断主義が科学研究上望ましくないのは、最初から結論が決まっているために、経験的証拠に基づく議論を途絶させるからである。これに対して、価値判断に基づく研究の全てが経験的な証拠を要しない独断的な議論であるとは限らない。例えばフェミニスト科学者が、女性の政治的指導者が少ない原因を女性の政治的資質の有無と関連づけて論じる場合、批判者はフェミニストの希望的観測、すなわち「女性には本質的に政治的資質がないわけではない」という結論に向かって証拠を集め、反証を排除して議論を進めて

いると批判するだろう。だが、自説にとって有利な発見ばかりでなく不都合な事実やうまく説明がつかない証拠を組み込むかどうかは、調査設計や議論の構成に関わる問題、研究の仕方に関わる問題である。そのため、やり方次第で独断主義を回避することは、価値判断を重視する研究でも可能である。フェミニストにとって、抑圧や収奪からの女性の解放の重視は、研究によって記述される現実ではなく追求すべき目標であり、結果というよりはむしろ研究の動機である。さらにフェミニズムそれ自体がそうであるように、政治的倫理的価値判断もまた状況や文脈の変化を踏まえて変容していくものであり、宗教的な原理主義の独断性などとはこの点で大きく異なる。つまり、価値判断を科学に持ち込むことが独断主義に直結するわけではなく、研究者の価値判断と経験的探究は両立し得る。

アンダーソンは、上記の観点からアビゲイル・スチュワート (Abigail Stewart) らの離婚研究を読み解いている。まず重要なのは、離婚を「家族の崩壊」と捉える伝統的 (家父長制的) 価値観の見直しを試みたスチュワートらのフェミニスト離婚研究が、従来の研究よりも多産的な結果をもたらしている点である。伝統的な離婚観では、離婚の否定的側面ばかりが強調されるのに対し、スチュワートらは離婚を家族形成と変化の長期的プロセスとして見直すことで、離婚後の当事者の質的变化や幸福増進といった肯定的側面を新たに発見している。それと同時にスチュワートらは、「養育権のない父親の定期的面会に不安を感じる子ども」のように、従来離婚観にとって

親和的な（すなわち離婚の否定的側面を扱う）論点についても検討を重ね、自分たちの研究にとって歓迎されない証拠についても慎重な分析を残している（同上: 19-20）。

こうした事例からも分かるように、結論ありきの独断主義に陥らず、むしろ価値判断を修正可能な規範的仮説として機能させることで、価値判断に基づく研究が科学的にも正当で、かつ認識論的にも実りある結果を導くことは可能である。「価値は『科学と無縁』ではなく、認識論的観点から言えば、価値判断は経験的仮説のようなもの」（同上: 11）なのである。

2. 科学的客観性の社会性

科学と価値が無縁ではないからこそ、そこから得られた知見は研究者個人の価値判断や社会的制約と不可分である。経験科学が、証拠による仮説の支持関係の妥当性を論証することで他者と共有可能な知識を生産する営みだとすれば、価値観や社会的制約の影響を受けた知識の客観性は、どのように担保されているのか。この問題を論じたのが、ヘレン・ロンジーノ（Helen Longino）である。以下、『社会的知識としての科学（*Science as Social Knowledge*）』（1990年）を中心に、彼女の議論を見てみよう。

同じ事実をめぐる、なぜそうなるかの説明が異なるケースは、日常のみならず科学史においてもたびたび生じる。例えば、「昼と夜が一定の間隔で入れ替わる」という事実に対して、今日であれば「それは地球が自転しているからだ」と説明するが、古代や中世であれば「太陽が地球の周りを回っているからだ」と説明するだろう。しかも、

証拠と論理に基づく説明を試みる点では、どちらの議論も「合理的」である。

合理的であるはずの議論で、なぜこれほどの違いが生じるのか。ロンジーノはこれを、「背景仮定（background assumption）」の違いだとする。背景仮定とは、どのような事象を、ある仮説を支持する証拠とみなすかに関わる諸信念である。昼と夜の入替わりという共通の事象から異なる説明が出てくるのは、地動説に立つ論者と天動説に立つ論者で、証拠と仮説をつなぐ背景仮定が異なるからである。

ロンジーノの議論のポイントは、この背景仮定を、推論や論理的思考だけでなく、社会や文化に関わる文脈的なものと捉えたところにある。背景仮定には、経験的証拠のあり方に関わる方法論的規則や推論規則、認知的バイアスなどに加えて、個人の嗜好や政治的信念、社会的圧力も含まれる（二瓶 2018: 36）。その意味で、背景仮定は社会的なものである。証拠と仮説をつなぐ背景仮定が社会的であるということは、そこから生まれる科学知識もまた、社会的な文脈性に依存していることになる。

科学は世界を客観的に捉える営みである以上、それが社会的なものと不可分だとすれば、科学的客観性もまた社会的だということである。ロンジーノによれば、科学的客観性が社会的である理由は、それが担保されるプロセス、すなわち科学者集団内での相互批判プロセスにある。一般的に、ある学術論文がその科学（学術）的価値を保証されるためには、掲載前のピア・レビューや掲載後の批判的検証を経なければならない。その一連の過程でテストされる

のが、当該議論における証拠と仮説の支持関係の妥当性、すなわちその論者が有する背景仮定の妥当性であり、研究者集団内での批判とそれによる議論の改訂を経て、当初の議論に含まれていた誤りや個人の偏向は修正されていく (Longino 1990: 68-74)。

重要なのは、科学者集団内での相互批判プロセスで営まれているのが、議論に含まれる個人個人のバイアスの完全な除去ではなく、それが科学知識の形成に与える影響のチェックだという点である (同上: 73)。二瓶真理子が指摘するように、社会的制約 (文脈性) や倫理的信念を重視した研究結果であっても、それを妥当とする科学者集団内での合意が成立するならば、その研究は客観的とみなされる (二瓶 2018: 38)。知識の科学性を担保する客観性が、科学者集団内での相互コミュニケーションによって成立しているという意味で、「科学知識は、個人間の相互作用を通して構築される社会的知識」である (Longino 1990: 231)。

まとめると、次のようになる。フェミニスト科学は、科学におけるジェンダー・バイアスや家父長制を問題視し、ジェンダーの視点を持ち込むことで、従来とは異なる科学的知見を生み出そうとする。科学におけるフェミニズムを志向する点で、それはまず政治性を有する営みである。そこで即座に問われるのが、バイアスや家父長制に対する批判意識やジェンダー視点が、科学的には「偏った見方」=非客観性につながるのではないかと、という問題である。これに対してFEが引き受けていったのが、「で

はそもそも、これまでの科学で想定されてきた客観性とは何なのか、それはどうやって担保されているのか」という科学的客観性の再検討である。

FEが導いた答えは、「どこでもない場所」から見る科学など存在しないが、それでも科学的探究はある仕方において客観的であり得る、というものだ。科学という営みは理論や仮説、証拠の選択において、研究の文脈や研究者の価値観から自由ではないが、アンダーソンの例が示すように、場合によってはその選択や志向が従来の研究よりも実りある成果につながる可能性はある。そして、研究成果の科学的な妥当性は、様々なテストや批判に耐えながら、集団的に担保されていく。フェミニスト科学者が自らの文脈性に基づいて、ジェンダーの視点を重視した仮説や証拠の選択から生み出した知見は、研究者集団の相互批判プロセスにかけられ、その客観性を担保される限りにおいて、非ジェンダー的な視点からなる知見と同様に科学的であり得るのである。だからこそ、客観性の程度を高めるためにも、相互批判プロセスに持ち込まれる研究者の価値観は、単一であるよりも多様であるほうが良い、ということになる。

もちろん、あらゆるテーマや問題がジェンダー視点の重視によって多産的になるわけではないが、より深遠な科学的理解を促進する可能性を有する点で、フェミニスト科学も十分に科学的である。また、経済的社会的な生活における女性の貢献や、受けてきた抑圧が解明されることは、女性に関す

る「認識的不公正」を言語化し⁴、男性優位社会の変化に資する意味で、政治的な取り組みにも連なっている。

だが、こうした科学的客観性と社会的な価値判断の関係性をめぐるFEの議論には一定の説得力がある一方で、その議論の射程範囲が研究者に限定される傾向も否めない。では、価値判断や社会性と共にある科学的探究は、科学者集団以外の人々にとって、どのような認識論上の利得をもたらすのだろうか。すなわち、フェミニスト社会科学は、フェミニスト社会科学であることで、どのような意義を持つのだろうか。

Ⅲ. フェミニスト社会科学の役割

フェミニスト認識論の中で、「フェミニスト社会科学は、いかなる意味でフェミニズム（思想）なのか」という問いに対し豊富な議論を積み重ねてきたのが、フェミニスト・スタンドポイント理論である。すでに述べたように、FSPとは被抑圧者の立場が認識論的優位性を持つとするスタンドポイント理論のフェミニスト版である。FSPについては、その本質主義的性格や認識的優位性論の妥当性に関する批判が早い段階から提起されており、FSPに関わる議論も、これらの批判やそれへの応答が多くを占める。そこでまずは、FSPの思想史をごく簡単に振り返ることで、その理論的特徴を明らかにしてみよう。

1. フェミニスト・スタンドポイント理論の思想史

1) 初期FSPとそれへの批判

1980年代以降に議論された初期FSPの中で大きな影響力を持ったのは、ナンシー・ハートソック (Nancy Hartsock) と前述のサンドラ・ハーディングである。ハートソックは、労働者の立場こそが歴史の本質的な理解に資するとするマルクス主義の階級意識論を読み替え、女性の立場を重視することが、男性優位社会に対する批判的認識に貢献するとした。ハートソックの問いは、なぜ性別分業は広範囲に制度化されているのか、すなわち、なぜ家事や育児を含む広義の再生産労働は社会的に「女性がすることになっている」か、というものだった。これらの問題関心から分かるように、FSPも当然のことながら、男性優位社会の批判的認識と状況改善の志向を、FEと共有している。

上述の問いに答える際ハートソックが重視したのが、精神分析の一つである対象関係理論である。それによれば、幼少期における親子（対人）関係の相違が、男女間で認識フレームの違いを生み、男性は抽象的で対立的、女性は具体的で関係的な捉え方をするようになる。女性と男性では生きる現実が違うために世界の捉え方も異なっており、この男女間の差異が性別による分業を正当化する (Hartsock 1983: 113-7)。男性がその生きる現実に規定されながら抱く認識は、社会の男性優位性に無自覚な点で部分的で歪んだものにならざるを得ない。ハートソックは、女性の立場に立つ認識こそが、社会批判として有効なツールになることを強調する (同上: 107-8)。

4 認識的不公正に関する議論は、III-2で詳述する。

ハーディングは、従来の客観性概念が男性的な視点からのみ導かれていた点を批判し、多元的な客観性を提唱した。ハーディングによれば、客観性は一元的ではなく多元的であることで、「強い客観性」になる。ここで言う客観性概念の多元化は、単に「単一の視点ではなく複数の視点で眺める」ことだけではない。まず多元化することは、自己の視点が持つ前提を、他方の視点から批判的に捉えることを意味する。そしてポイントは、周縁化された女性の視点から生まれる知識が、支配的な男性のそれと比べて不完全さと歪みが少ない、すなわち、より誤りが少ない (less false) ものだという点にある (Harding 1991: xi)。女性を含め、あらゆる視点は不完全で歪んでいるため、誤謬のない完全な視点は存在しない。だからこそ、より誤りの少ない視点を組み合わせることで、相対的に「強い」客観性を志向することが重要であるとハーディングは主張する (同上: 187)。

先に指摘したFSPの理論的難点は、ハートソックやハーディングら初期FSPの議論にすでに見えている。ハートソックであれば、性別分業に対する批判的認識の基礎を精神分析に求めたことで、女性の被抑圧性を本質化し、結果的に女性の多様性を見失うことになるのではないかという本質主義の問題である。またハーディングであれば、特定の(=女性の)立場を重視するという相対主義に立つ一方で、それが男性的な立場に由来する知識よりも誤りが少ないものだと判断できる真偽の判定基準、すなわち世界についての「より良い」説明と「より悪い」説明の弁別可能性を暗黙の前提にし

ていることの矛盾が問題視される (Sullivan 2001: 138-9)。

初期FSPの問題点を的確に批判しつつも、FSPとはやや違う角度からその意義を論じたのが、ダナ・ハラウェイ (Donna Haraway) である。ハラウェイは、スタンドポイントに似た概念として「視覚 (vision)」を提示し、科学知識の客観性が視覚、すなわち身体化された感覚に基づく点で、「状況づけられている」と述べる。科学の生み出すものが「状況づけられた知識」である以上、身体性を排した無限の視覚などというものは幻想に過ぎない。その意味で、科学的客観性は「何が合理的な知識なのか」をめぐる政治的倫理的闘争の産物である。フェミニズムが従来の科学で想定されてきた視覚の単一化に対抗するものである以上、「単一のフェミニスト・スタンドポイント」は存在しないが、「フェミニスト・スタンドポイント論者の目標である、関与し、責任を負うべき位置づけの認識論と政治学は、依然として非常に説得力がある」とハラウェイは述べる (Haraway 1988: 590)。

だがウマ・ナーラーヤン (Uma Narayan) が指摘するように、被抑圧者の立場が、抑圧の原因についての正確で優れた知識を自動的にもたらすわけではない。というのも被抑圧者は、抑圧される立場だからこそ、その抑圧に関する理論や知識を得る機会 (例えば高等教育) から構造的に排除されやすいからである。その意味で、被抑圧者の認識論的優位性は、そのままは認められるわけではない。むしろこの議論のポイントは、被抑圧者が果たす社会認識上の優位的役割を、政治的・道徳的に要請するところ

にある (Wylie 2012: 62-3 も参照)。被抑圧者は、外部者よりも自分たちの状況についてはるかに詳細に知っており、自分たちのためにそれを語るができる。被抑圧者が自分たちのために語る権利と力を持つことは、「抑圧された集団の自律性、アイデンティティ、自尊心と密接に結びついている」(Narayan 1988: 38)。

また、精神分析を用いた女性の共通性発見という発想が、確かに本質主義的傾向を持つことは否めないものの、ハートソック自身も女性間の差異について慎重に留保しながら、共通性の析出を政治的な戦略として位置づけている (Hartsock 1983: 112)。そのハートソックを引きながら、キャシー・ウィークス (Kathi Weeks) は、FSP を「特定の主体の位置づけに関わる集合的な解釈や再構築であり、あらゆる女性に自然発生的に生じる属性や意識というよりも、進行中の成果」だと述べる (Weeks 1998: 188)。

以上から推察されるように、フェミニスト社会批判の有効性を特定のスタンドポイントと結びつけて強調することは、FSP において政治闘争上の戦略と位置づけられていた。FSP はその初期段階から、被抑圧者が自ら語ることでアイデンティティや自尊心を獲得し、集団性を形成していく足がかりとして、スタンドポイントを捉えていた。FSP は、自覚的な政治的コミットメントを強く念頭に置いた認識論として展開されてきたのである。

2) 政治性への批判と反批判

上記で述べた FSP の政治性に対するポス

トモダン批判を展開したのが、スーザン・ヘクマン (Susan Hekman) である。脱構築論に立つヘクマンは、ハートソックやドロシー・スミス (Dorothy Smith) らの FSP が、「言説」による現実の構築という相対主義的な見方をとる一方で、支配階層や抑圧者 (=男性) ではなく女性のほうが「現実」を正しく捉えられるとする、言説と現実の二項対立図式を堅持している点を批判する。言うなればそれは、不徹底な社会構築主義に他ならない。社会分析の方法論として FSP を見た場合、それは二重の問題に取り巻かれている (Hekman 1997: 359)。第一に、究極的には全ての女性がユニークなのだから、「女性」というカテゴリーがそもそも不可能である。しかも第二に、複数の立場の間で認識論上の優位性を差別化 (階層化) することなどできない。ヘクマンは、ウェーバーの理念型と価値自由論を FSP に替わるフェミニスト認識論の枠組みとして示しながら、立場の多様性という認識論的問題と特定の価値への関わりという政治的問題を、あくまでも別物として切り分けようとする。ヘクマンからすれば、20 世紀のフェミニズムが「政治の言語ゲームを変えた」(同上: 363) としても、だからといって抑圧や暴力からの女性の解放にコミットするかどうかは各人の判断に委ねられる。科学と政治は相容れない。FSP の誤りは、この二つを無理につなげようとしたところにある。

このヘクマンの FSP 批判に対して、スタンドポイント理論擁護のための反批判を展開した一人が、パトリシア・ヒル・コリン

ズ (Patricia Hill Collins) である⁵。コリンズにとってスタンドポイント理論の意義は、不公正な権力システムの維持あるいは変化に、知識がいかに作用するかを明らかにできるところにある。ヘクマンは全体的にこの点を読み誤っており、FSPの潜在的なラディカルさを脱政治化してしまっている (Collins 1997: 375)。スタンドポイント理論の理解においてコリンズが重視するのは、ある立場が集団、といっても単なる個人の自発的集合ではなく、ある権力関係の中で共有された歴史を持つ集団の経験に基礎を置いている点である。例えば、人種差別の個人的経験は多様であっても、アフリカ系アメリカ人という集団として人々が日々直面する事態に、何らかの共通性や類似性を見出すことはできる。集団的に共有された経験としてのスタンドポイントに注目することで、人種という立場から異なる地域に住む人々の異なる経験を結びつけることができるし、あるいは反対に、同じ場所で働く女性たちを、人種や経済状況に基づく集団的な階層構造にそれぞれ割り当てることで、差異を有する存在として分類することも可能である (同上: 377-9)。また、男性／女性や白人／黒人のように、ある立場は他の立場に比べて権力関係上、特権的な位置を占める。そのため、スタンドポイントを重視するだけで、それが社会批判に結びつくわけではない。むしろヘクマンが強調する価値自由論は、立場の階層性を批判的に捉えられず、かえってその特権性を強化し

てしまうことにもなりかねない。スタンドポイント理論は権力関係とそれがはらむ抑圧を問題にするための思想であり、「『政治の言語ゲーム』を変えること以上のものを含んでいる」思想であることを、コリンズは示す (同上: 381)。

ここまでの歴史的整理を踏まえて見えてくるように、FSPの意義は、その権力関係批判の側面や政治的コミットメントの強調に求められてきた。アリソン・ワイリー (Alison Wylie) が述べるように、スタンドポイント理論は「フルサービスの認識論ではない」 (Wylie 2012: 61)。FSPは、認識のあり様に関する説明を全て提供 (=フルサービス) してくれるものではなく、むしろ、ジェンダー不平等を是正していくために必要な認識論を (セルフサービスのよう) 自ら取りにいく立場である。前述したFEが、「価値判断や社会性と無縁でない科学は、いかなる意味で客観的たり得るか」という問いに応答したものだとするれば、FSPはそうした認識論的枠組みを共有しつつ、「道徳的政治的コミットメントを重視することは、どのような認識上の生産性や社会的意義を持ち得るか」を問うてきたものだと言えよう。

その回答においてFSPが足がかりとしてきたのは、「社会的位置 (social location)」に基づく認識の多様性である (Wylie 2003)。あらゆる認識は状況づけられ、また身体化され社会化される以上、その者の社会的

5 ヘクマンのFSP批判が掲載された『サインズ (Signs)』誌同号では、コリンズの他にハートソック、ハーディング、スミスらによる反批判が掲載されている。

位置に由来する権力関係や抑圧の様態もまた、その認識に反映されている。したがって、権力関係や抑圧の様態を批判的に捉えることを目的とするフェミニスト研究ならば、被抑圧的な立場に立たされる者（それは研究者本人の場合もあるし、研究対象の場合もある）を含む方が、そうでない場合と比べて、認識上のアドバンテージを持つ可能性は高くなる。FEと同様、FSPも認識上の多様性を重視するが、そこで重視されるのは、FEが想定する研究者内の見解の多様性というよりも、被抑圧者集団を取り巻く状況・構造に対する批判とその改善という道徳的政治的目的に適う限りでの、彼／女ら（被抑圧者）のマイノリティ性である⁶。

そこからすれば、FSPにおける認識論的優位性を、「女性の立場」の一般的な優位性だとするのはミスリードであることが分かる。道徳的政治的コミットメントの要請を念頭におけば、FSP本来の問いは、被抑圧者（フェミニズムの場合は、男性優位社会における女性）の状況改善や解放という政治的プロジェクトにコミットする者にとって、被抑圧者や周縁部の立場は有益かどうかである。そしてそれは、ナーラーヤンが示唆したように、「場合による」のである。

2. フェミニスト・スタンドポイント理論と科学的／知的運動

ではどういう場合であれば、政治的プロジェクトにコミットするフェミニスト社会学者にとって、被抑圧者の視点が認識論的な生産性を持つだろうか。クリスティー

ナ・ローリン (Kristina Rolin) の議論を参考にして考えてみよう。

ローリンは、FSPが前提とする政治的コミットメントを伴う研究者の集団的な存在を、ある種の社会運動体として捉えている。ローリンは、科学社会学者であるフリッケルとグロスの議論 (Frickel & Gross 2005) に依拠しながら、FSPの独自性を「道徳的・社会的価値が、科学的／知的運動を通して認識論的生产性を持ち得るという考え方」(Rolin 2016: 12) にあるとしている。フリッケルとグロスによれば、科学的／知的運動 (Scientific/Intellectual Movements: 以下、SIMsと略記) とは、自分たちの考え方に基づく科学的知見の生産と拡散を通じて、より大きな研究者コミュニティの変化 (例えば定説の変更) を狙う、サブコミュニティによる知的社会運動を指している。SIMsは、知識生産に深く関わるという点で知的な運動であるが、科学領域における権力関係を変化させることを企図する点で政治的な運動でもある。さらにSIMsは、固定的な研究室や組織を基盤とする一般的な研究活動グループとは異なり、フェミニストによる研究プロジェクトのように、領域横断的だったり地理的に多様だったりするメンバーが連携して、会議の運営や学術誌の発行、学会の形成を進めていく、組織的な集団行動である。

フリッケルとグロスによるSIMs論が、あくまでも研究者コミュニティ内部での論争的なアイデアの生産と拡散を狙ったサブコミュニティの知的社会運動を科学社会学

6 FEとFSPにおける多様性概念の相違については、二瓶 (2021b) を参照。

的に捉え直すことを目的としていたのに対し、ローリンはSIMsとFSPを重ね合わせることで、彼ら以上にその意義を強調している。すなわちローリンは、フェミニストの政治的プロジェクトにコミットする研究者らのサブコミュニティ(=FSP的なコミュニティ)の活動には、科学者コミュニティ内の変化を超える社会的意義があることを示し、そこにFSPの認識論的生産性を見ようとしている。

その社会的意義とは何か。一言でいえば、エンパワーメントである。第一にそれは、フェミニスト社会学者が関わる相手(調査協力者や証言者など)に対するエンパワーメントであり、第二にフェミニスト社会学者自身に対するエンパワーメントである。

第一の、フェミニスト社会学者の調査対象に対するエンパワーメントとは、研究者が被抑圧者や周縁的存在の立場を重視した調査を行うことで、社会的な権力関係が引き起こす「認識的暴力」を取り除くことを意味する(Rolin 2016: 17)。自分が属する組織、社会から受ける差別や抑圧について話すことで失職やバッシングにつながるかもしれないという恐怖は、従属的な立場にある者の証言を控えさせるだろう。あるいはミランダ・フリッカー(Miranda Fricker)が論じたように、社会的な権力関係が作用することで、被抑圧者の証言が歪曲される「認識的不公正」が生じる(Fricker 2007)。例えば、白人ないし男性優位の社会では、黒人や女性の発言や証言は、人種やジェンダーを理由にその信憑性が割り引かれる可能性

が高くなる(証言的不公正)。または、何らかの差別や蔑視、軽視、抑圧を表現する言葉や概念(例えば「セクハラ」)がなければ、従属的な立場にある者の経験は、存在しないも同然になってしまう(解釈的不公正)⁷。

ローリンによれば、SIMsは、権力関係が引き起こす「証言生産の歪曲」を防ぐことが可能である(Rolin 2016: 17)。その理由は、SIMsが集団的な知的・政治的運動であることに求められる。SIMsとは研究者個人による調査にとどまらない、規範的な目標を持った集団による政治的取り組みである。そうした取り組みの一部として調査に関わるということは、証言者の孤立感や恐怖感を緩和し、自分の経験が個人的なものではなく、集合的なものであると認識できる可能性をもたらす。またSIMsが知識生産を担う運動であることで、証言者の経験や感情を的確に表現する新たな概念を生み出し、解釈的不公正の解消に貢献することも考えられる。

証言生産を阻む権力関係の壁を崩すものとしてのSIMsの集団的性格は、第二の、研究者自身へのエンパワーメントにもつながっている(同上: 17-8)。被抑圧者の証言や経験を集めて生まれた知見は、大きな研究者コミュニティで議論の俎上に載せようとしても、無視や沈黙、過剰に厳しい批判といった不当な扱いを受ける可能性が高い。そうした知見は、既存の枠組みにおいて見過ごされたり、タブー視されたりしてきたものだからである。そうやって引き起こされる研究者の孤立は、社会的に不公正

7 認識的不公正については、Fricker(2007)の他に、Anderson(2012)やKoskinen & Rolin(2019)を参照。

なだけでなく、生産された知識に対する批判や修正、洗練の契機を奪うという点で認識論的にも不当である。一方、研究者がSIMsというサブコミュニティに属しながら研究を行うことは、大きなコミュニティでは望めなかった建設的な議論を可能にする。その意味でSIMsは、研究者にとっても、社会的／認識論的不公正を取り除くことにつながっている。まとめて言えば、SIMsのようなサブコミュニティによる集団的探究の存在意義は、抑圧された者やその声に耳を傾ける研究者が、権力関係や抑圧の構造ゆえに陥ってしまう認識的不公正を是正できるところにある。

しかし、特定の価値判断を有する研究者がSIMsを構成することは、諸刃の剣にもなる。特にリコ・ハウスウォルド (Rico Hauswald) が指摘するように、サブコミュニティが特定の活動家と協力関係にある研究者によって占められている場合、SIMs内部の志向が単一化し、集団バイアスを蓄積させてしまうリスクがある (Hauswald 2021)。周縁部の証言者ならびに研究者という、権力関係の中で孤立しがちな存在をSIMsという知的・政治的運動に巻き込んでいくことは、社会や学界の「常識」を覆す足場になる一方で、それが過度に内向きになった場合は、コミュニケーション能力を失った閉鎖的な集団にもなり得る。

SIMsによる集団バイアスのリスクを少しでも小さくするには、どうしたらよいか。ハウスウォルドに依拠すれば、SIMsの集団バイアスが生じる要因の一つは、サブコミュ

ニティがその政治性ゆえに、より大きな科学コミュニティとの接点をなくし、孤立していくことにある。しかしそもそもFSPでは、想定されるコミュニティの規模や多様性の捉え方が、FEとは異なる。FSPが重視する多様性とは、研究者コミュニティの中で伝統的に支配的な位置を占めてきた人々、「具体的には、男性とかアングロサクソン系の人々、先進国の人々などを……含まないか、より少なく含むような意味での多様性」であり、それは「共同体内部に存在する具体的価値観の内容の数がより多いほど、科学者共同体の多様性は高い」とするFEの多様性認識とずれている (二瓶 2010b: 94-6)。そうだとすれば、FSPの言うサブコミュニティ (例えばSIMs) に、FEが強調してきた研究者コミュニティでの相互批判プロセスの役割を求めることはできない。あくまでもFSP的なサブコミュニティの役割は、それ自体が客観性を担保するための包括的集団になりかわることではなく、より開かれた相互批判プロセスに加わっていくための足がかりとなることである⁸。

つまりSIMsにとって肝要なのは、被抑圧の当事者と、より大きな科学コミュニティをつなぐ媒介となることである。インケリ・コスキネン (Inkeri Koskinen) とローリンが、先住民のニーズと関心事に関連した知識生産に携わる先住民研究 (indigenous studies) の例で示すように、先住民たちの土地に対する自己理解を言語化することだけが、SIMsの社会的意義になるわけではない。それ以上に先住民研究は、土地に対す

8 FSPの理論的正当化において、FEが強調してきた研究者集団内での相互批判プロセスの議論が意味を

る先住民の捉え方が近代的な法制度の中でどう位置づけられるかを彼／女らに示し、必要に応じて法的アドバイスを提供することで、認識論的にも政治的にも不公正な立場に置かれやすい先住民の状況改善に貢献している (Koskinen & Rolin 2019)。フェミニスト社会科学がFSP的な観点からサブコミュニティを形成する意味も、抑圧された者たちの立場や視点、経験を科学的な認識へと変えることを通じて、それらをより大きな文脈に乗せ、状況の変化を目指す拠点となるところにある。そしてここに、FEの議論だけでは見えてこない、FSP的な役割の重要性があると言える。

無論だからといって、SIMsの集団バイアス発生を完全に回避できるわけではないだろう。FSPの論者たちが繰り返し指摘してきたように、その認識論的な優位性は自動的なものではなく、自覚的な取り組みによって事後的に「獲得される」ものである (Wylie 2003: 38-9)。「フルサービスの認識論」でないからこそ、その知的および政治的有効性に対する省察が、常に求められるのである。

結論

ここまでの議論を踏まえて、本稿全体の問いに答えよう。フェミニスト社会科学に

とっての科学性とは、他の科学一般と同様に、その知見が経験的証拠によって論理的に組み立てられ、さらにそれが研究者コミュニティ内での相互批判と修正のプロセスを経て、「客観的である」という合意を得られる場合に保証される。価値判断は、研究の動機や調査設計を方向づける点で科学にとって無縁なものではなく、フェミニスト社会科学にとってもそれは同様である。さらにフェミニスト社会科学は、男性優位社会における女性の状況改善や解放に有益な知見を生み出そうとする規範性を伴う政治的な営みでもある⁹。その方向性の一つは、ジェンダーの視点を取り入れることで、女性が被る抑圧や不平等、貢献を解明し、より深い学問的理解をもたらすことである。あるいはSIMsのように、集団的な知的・政治的運動を通じて証言者や研究者の孤立を防ぎ、彼／女らをエンパワーすることである。フェミニスト社会科学は、証言や建設的議論を阻む権力関係に対抗しながら新たな知識の産出に携わることで、従来の理解からは排除されてきた現象や実態をより大きな文脈の中に位置づけ、認識論的ならびに政治的な不公正を是正していく知的な営みなのである。

FEとFSPの相違をあえて図式化すれば、前者がジェンダー視点を取り入れることで

持つのは、ここである。FSPが強調するマイノリティ性の注視が閉鎖的なものとならないためには、FEによる科学的客観性の議論によって相互批判プロセスへの理解を補う必要がある。本稿が、FEとFSPをフェミニスト認識論の両輪であると位置づける理由は、これである。

9 議論の拡散を防ぐため、本稿ではフェミニスト社会科学が追求する規範をジェンダーに絞って捉えたが、ここに経済階層や人種、民族、宗教、身体、年齢、地理的状况などをめぐる関係性が交差的に関わることは言うまでもない。またそれゆえ、フェミニスト社会科学の規範性は、ジェンダーに特化しながらも、これらの諸要因に関わるバイアスや不公正の是正という目的を排除するわけではない。Intemann(2010: 206)を参照。

科学知識の質的向上を図りフェミニズムの理想の実現を目指す立場であるのに対し、後者は科学的探究を通じた被抑圧者のエンパワーメントを通じてジェンダー平等を志向する立場だと言える。どちらをより重視

するかは、各研究者やコミュニティ次第である。しかしどちらを採るにせよ、フェミニスト社会科学の存在意義は、科学的であろうとすることと政治的であろうとすることの接点に見出されていくものだと考える。

参考文献

- Anderson, Elizabeth, 2004, "Uses of Value Judgments in Science: A General Argument, with Lessons from a Case Study of Feminist Research on Divorce", *Hypatia*, 19(1): pp.1-24, (2022年8月8日取得, JSTOR, pdf).
- . 2012, "Epistemic Justice as a Virtue of Social Institutions" in *Social Epistemology*, 26(2): pp.163-73.
- . 2020, "Feminist Epistemology and Philosophy of Science", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, (2022年11月16日取得, <https://plato.stanford.edu/entries/feminism-epistemology/>).
- Collins, Patricia Hill, 1986, "Learning from the Outsider Within; The Sociological Significance of Black Feminist Thought" in Sandra Harding ed, 2004, *The Feminist Standpoint Theory Reader: Intellectual & Political Controversies*, New York and London, Routledge.
- . 1997, "Comment on Hekman's "Truth and Method: Feminist Standpoint Theory Revisited": Where's the Power?" *Signs*, 22(2): pp.375-81, (2022年12月21日取得, JSTOR, pdf).
- Crasnow, Sharon, 2007, "Feminist Anthropology and Sociology: Issues for Social Science", in Stephen Turner and Mark Risjord eds., *Philosophy of Anthropology and Sociology*, Amsterdam, North-Holland.
- Frickel, Scott, Neil Gross, 2005, "A General Theory of Scientific/Intellectual Movements", *American Sociological Review*, 70(2): pp.204-32, (2022年8月19日取得, JSTOR, pdf).
- Fricke, Miranda, 2007, *Epistemic Injustice: Power & the Ethics of Knowing*, Oxford, Oxford University Press.
- Haraway, Donna, 1988, "Situated Knowledges: The Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective", *Feminist Studies*, 14(3): pp.575-99, (2022年12月21日取得, JSTOR, pdf).
- Harding, Sandra, 1986, *The Science Question in Feminism*, Ithaca, Cornell University Press.
- . 1991, *Whose Science? Whose Knowledge?: Thinking from Women's Lives*, Ithaca, Cornell University Press.
- Hartsock, Nancy, 1983, "The Feminist Standpoint: Developing the Ground for a Specifically Feminist Historical Materialism", in *The Feminist Standpoint Revisited and Other Essays*, 1998, Boulder, Westview Press.
- Hauswald, Rico, 2021, "The Epistemic Effects of Close Entanglements between Research Fields and Activist Movements", *Synthese*, 198(1): pp. 597-614.
- Hekman, Susan, 1997, "Truth and Method: Feminist Standpoint Theory Revisited" *Signs*, 22(2): pp.341-65, (2022年12月21日取得, JSTOR, pdf).
- Intemann, Kristen, 2010, "Feminist Standpoint Empiricism: Rethinking the Terrain in Feminist Philosophy of Science", in P. D. Magnus and Jacob Busch eds., *New Waves in Philosophy of Science*, New York, Palgrave Macmillan.
- . 2016, "Feminist Standpoint", in Lisa Disch and Mary Hawkesworth eds., *The Oxford Handbook of Feminist Theory*, Oxford, Oxford University Press.
- Koskinen, Inkeri, Kristina Rolin, 2019, "Scientific/Intellectual Movements Remediating Epistemic Injustice:

- The Case of Indigenous Studies”, in *Philosophy of Science*, 86(5): pp.1052-63.
- Longino, Helen E., 1990, *Science as Social Knowledge: Values and Objectivity in Scientific Inquiry*, Princeton, Princeton University Press.
- . 2002, *The Fate of Knowledge*, Princeton, Princeton University Press.
- Narayan, Uma, 1989, “The Project of Feminist Epistemology: Perspectives from a Nonwestern Feminist”, in Sandra Harding ed, *The Feminist Standpoint Theory Reader*.
- 二瓶真理子, 2018, 「批判的文脈的経験主義における科学の社会性と客観性」『松山大学論集』（松山大学総合研究所）第29巻第6号：pp.31-53, (2022年8月1日取得, 松山大学機関リポジトリ, pdf).
- . 2021a, 「科学における価値と客観性に対するフェミニスト科学哲学のアプローチ——フェミニスト経験主義とフェミニストスタンドポイントの展開」『松山大学論集』（松山大学総合研究所）第33巻第1号：pp.91-112, (2022年8月1日取得, 松山大学機関リポジトリ, pdf).
- . 2021b, 「科学における多様性に関するフェミニスト科学哲学の主張——平等主義的多様性と規範的多様性」『モラリア』（東北大学倫理学研究会）第28号：pp.81-99, (2022年8月1日取得, 東北大学機関リポジトリ, pdf).
- Rolin, Kristina, 2006, “The Bias Paradox in Feminist Standpoint Epistemology”, *Episteme*, 3(1-2): 125-36.
- . 2016, “Values, standpoints, and scientific/intellectual movements”, *Studies in History and Philosophy of Science*, 56: pp.11-9.
- . 2021, “Objectivity, trust and social responsibility”, *Synthese*, 199(1-2): pp.513-33.
- Sullivan, Shannon, 2001, *Living Across and Through Skins: Transactional Bodies, Pragmatism, and Feminism*, Bloomington, Indiana University Press.
- Weeks, Kathi, 1998, “Labor, Standpoints, and Feminist Subjects”, in Sandra Harding ed, *The Feminist Standpoint Theory Reader*.
- Wylie, Alison, 1992, “Reasoning about Ourselves: Feminist Methodology in the Social Sciences”, in Elizabeth D. Harvey and Kathleen Okruhlik eds., *Women and Reason*, 1992, Ann Arbor, University of Michigan Press.
- . 2003, “Why Standpoint Matters”, in Robert Figueroa and Sandra Harding eds., *Science and other cultures/issues in philosophies of science and technology*, New York and London, Routledge.
- . 2012, “Feminist Philosophy of Science: Standpoint Matters”, *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 86(2): pp.47-76, (2022年8月4日取得, JSTOR, pdf).

(掲載決定日：2023年5月18日)

Abstract

The Scientific and Political Nature of Feminist Social Science
based on an Integral Understanding of Feminist Epistemology

Kenta Onodera*

This study employs the lens of feminist epistemology to discuss the scientific and political nature of feminist social science. Several debates have been mooted since the 1980s about the extent to which research based on a particular value judgment of feminism may be deemed scientific. Scholars have also deliberated on the significance of so-called scientific research endeavors for feminism as a political and social movement. This study focuses on the theories of feminist empiricism and feminist standpoint that have driven such arguments to offer a conceptual examination of the scientific and political aspects of feminist social science. I make two claims based on my findings. First, scientific research is not free from value judgments, which can lead to beneficial scientific findings. Second, feminist social science contributes as a collective intellectual and political movement to the creation of testimonies of marginalized groups, results in constructive discussions among researchers, and exerts an inclusive epistemological impact.

Keywords

feminist epistemology, feminist empiricism, feminist standpoint theory, scientific/intellectual movements, epistemic injustice

*Japan Women's University, Associate Professor.